

動物としてのヒトのこころ

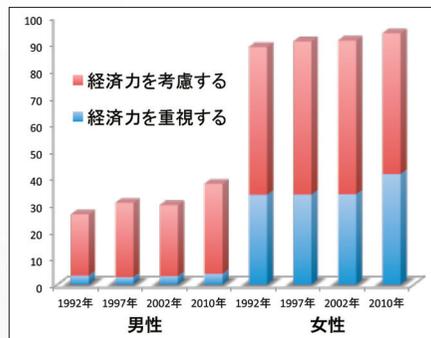
研 究

THE FRONT LINE
of RESEARCH

最 前 線

私は実験を通じてさまざまな社会問題の根底にある個人の心理について明らかにしようとしています。私が研究をする上で大切にしていることは、ヒトもまた動物であるという考え方です。このことを説明するために例を出します。図1をみてください。これは平成25年版の厚生労働白書にある、結

図1 結婚相手に求める経済力にみられる性差



出典：平成25年度版 厚生労働白書

婚相手にどの程度経済力を求めているかのデータです。これを見ると明らかに女性の方が男性よりも結婚相手に経済力を求めています。それはなぜでしょうか？

「ヒトを動物として捉える」観点からは次のように説明することができます。まず、小さな生殖細胞（精子）を作る性がオス、大きな生殖細胞（卵子）を作る性がメスです。生殖細胞は大きいものを作る方が大変で、ヒトの場合、男性は平均して1時間に約1200万個の生殖細胞を作りますが、女性は平均して一生で約4000個の生殖細胞しか作れません。このことは、子どもを作る上で女性の方が男性に比べてコストがかかることを意味します。そして動物の求愛では、子作り・子育て上、コストのかかる方の性（たいていメス）がコス

PROFILE



樋口 収
Osamu Higuchi

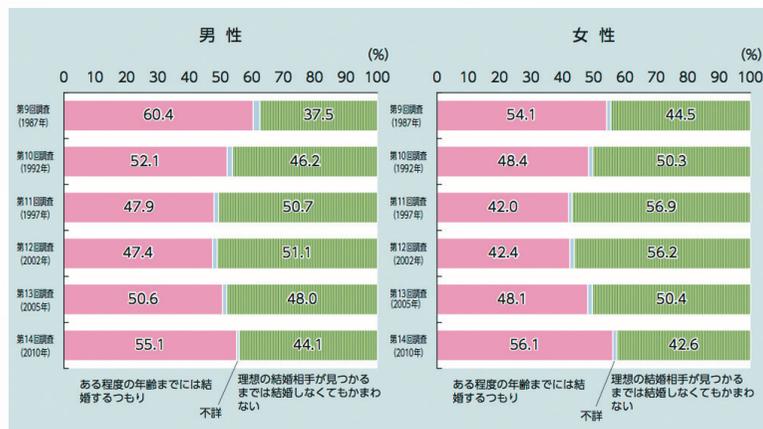
政治経済学部専任講師
専門：社会心理学

1977年 神奈川県生まれ
2000年 一橋大学社会学部卒業
2011年 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程修了 博士(社会学)
2017年より現職

主な著書・論文
『偏見や差別はなぜ起こる?』(共著・ちとせプレス・2018年)
『社会心理学概論』(共著・ナカニシヤ出版・2016年)

所属学会
日本社会心理学会、日本心理学会

図2 結婚観にみられる性差



出典：平成25年度版 厚生労働白書

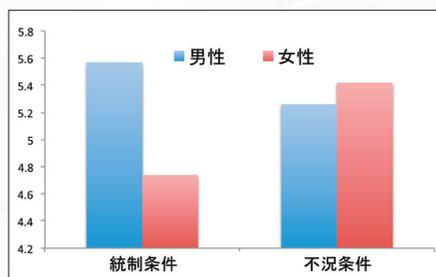
トのかからない方の性（たいていオス）を選びます。選ぶ基準はいくつありますが、そのひとつが食べ物の提供です。子どもを残すためには自分も生き残らなければならぬからです。ヒトの場合、この食べ物に該当するのがお金、

すなわち経済力というわけです。次に、図2をみてください。このデータは男女の結婚に対する考え方に関するもので、結婚自体を重視するか、結婚の内容を重視するかを示しています。この図には興味深い点があります。この図には

とつは、ほとんどの年で「理想の結婚相手が見つかるまでは結婚しなくてもかまわない」と結婚の内容を重視したのは、男性よりも女性の方が多いということです。この結果を意外に思われる方がいるかもしれませんが、子作り・子育てには女性の方が男性よりもコストがかかるため、女性は結婚に対して慎重であると考えれば説明がつかえます。もつひとつは、男女ともに結婚の内容を重視する人が1992年には増え、1997年、2002年には結婚自体を重視する人よりも多くなっているこ

とです。なぜこのような結果になったのでしょうか？この年号をみて思いつくのは、日本の「失われた10年」とよばれる経済不況の時期と重なるということ。では、不況は結婚観に影響を与えるのでしょうか？理論的にはありえます。たとえば、ある心理学実験では結婚市場において女性が男性よりも相対的に多いと知覚するだけで、女性は結婚を先延ばしにし、キャリア志向を強めることが示されています。

図3 不況の知覚が結婚観に与える影響



注) 縦軸は、希望する結婚時期(年後)を表している
出典：樋口他(未発表)

これは経済力のある男性が減り、いま無理に子どもを作るよりも、時間をおいて子どもを作った方がよいと無意識的に判断するためだと考えられています。不況もこれと同様の効果をもつ可能性があります。不況になると経済力のある男性が相対的に減るからです。そこで私たちは実験を実施し、統計的分析を行い、この因果関係を検証しました。その結果が図3です。まず、不況の知覚を高めていない「統制条件」では、女性の方が男性よりも早く結婚したいと回答していました。この傾向はこ

れまでの調査データと一致しています。一般に平均希望結婚年齢は、女性の方が男性よりも低いのです（たとえば、2010年の調査では男性30・4歳、女性28・4歳です）。しかし、不況の知覚を高めた「不況条件」をみると、この性差は消失していました。つまり、女性不況だと知覚すると、それだけで結婚を先延ばしにする可能性があるということです。現在、ヒトを動物と捉える観点にたつ心理学研究は、こうした研究以外にも多くの新しい研究知見を産み出しています。